

### 第3章 芝蘭会国際交流会館建設予定地 AR19 区の発掘調査

森下章司

#### 1 調査の経過

本調査区は、京都大学医学部構内の北に位置する（図版 1-190）。現在調査区の南辺に沿って、近世白川道の名残をとどめる道路が南西から北東へと伸びている。ここに芝蘭会国際交流会館の建設が予定されたため、これまで主として本部構内でその遺構を確認してきた白川道の西方での位置と構造の確認を目的として、1988年4月4日～8日に4ヶ所の試掘坑をあけて試掘調査をおこなった。その結果、近世白川道の北側の肩を確認したほか、瓦溜状の遺構をはじめとする中世の遺構を検出したため、建設予定地南半の発掘調査をおこなうこととなった。期間は5月9日～5月31日、面積は216m<sup>2</sup>である。

#### 2 層位

調査区は西にのびる微高地の縁辺部に位置し、西に向かっては調査区の西辺を境に段をなして傾斜し、また南の医学部構内に向かっては、道を境に落ち込む地形上に位置する。

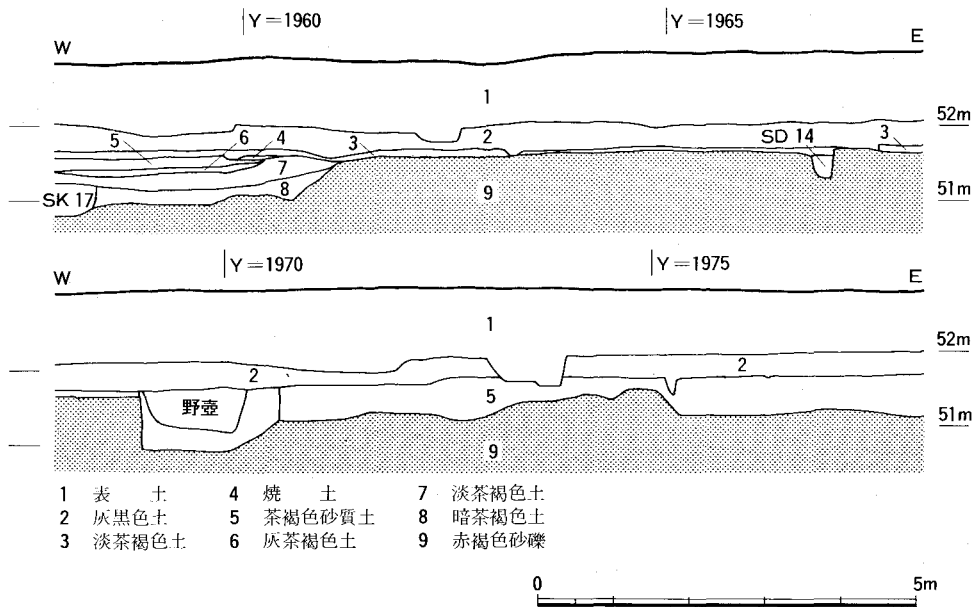


図25 調査区北壁の層位 縮尺 1/100

基本的な層序は上より、表土、灰黒色土（近世遺物包含層）、茶褐色土（中世遺物包含層）、赤褐色砂礫の順であった（図25）。また、Y=1960 付近では中世の遺物を含む黄褐色粘質土層を茶褐色土層下で部分的に検出している。赤褐色砂礫は高野川系流路による堆積物で、この付近の基盤を形成している。この層の上面は東から西へゆるやかな傾斜を示し、Y=1960 付近で、標高差 60 cm ほどの段をなして西に落ち込んでいる。この段を境に茶褐色土の堆積状況にも違いがあって、Y=1960 より西部では焼土を含めて5層に区分できる層が1m 近く堆積しているのに対し、東部では40 cm～数 cm の堆積層を残すに過ぎない。東部ではわずかに底を残して上部をほぼ削り取られた土坑を検出しており、中世の遺物包含層の大部分は近世に削平されたことを示す。

### 3 遺 構

#### (1) 中世の遺構（図版12, 図26）

検出した中世の遺構には、建造物に関連する遺構と考えられる石組、瓦溜、柱穴の可能性をもつ土坑のほか、土坑や溝などがある。中世の遺構の多くは Y=1960 以西で検出しており、先に述べたように東半の遺構は削平されたものと考ええる。

石組 SX1（図版12-3） 調査区の南端、道路 SF1 の下 30 cm で南へ傾斜する石組の上端を検出した。上部は溝 SD15 によって削られている。断割り調査の結果、地山となる赤褐色砂礫層の南への傾斜に沿って積まれた石組であることが判明した。石組の下半は現在の道路下に向かって深く食い込んでおり、全体の規模・形状を確認することはできなかったが、東西方向へ伸びている。石組内及び石組下出土の遺物から、13世紀の遺構と考える。

瓦溜 SX2（図版12-1） 調査区西半で、東西に伸びる溝状の遺構 SX2 を検出した。両端は土坑 SK5, SK6 によって切られている。断面はU字形を呈し、多数の瓦、花崗岩の破片、焼土等がまつまっていた。瓦と花崗岩にも火を受けた痕がみられる。

土坑（図版12-2） SK8・SK9・SK10 は、ほぼ南北方向に 1.5 m の間隔で並び、SK8・SK9 の底部には人頭大の河原石が置かれていた。根石をもつ柱穴の可能性が高いと考えられるが、東方、西方への続きは検出できず、北方への並びも確認できなかった。SK15 は直径 60 cm ほどの小さな土坑であるが、長胴の土師器の壺と土師器皿が納められていた。病院構内 AJ19 区の調査で同様の組み合わせの遺物が出土した深いすり鉢状の土坑 SK6 がみつまっている〔五十川・浜崎・伊東89〕。出土遺物から時期は13世紀前葉と考

遺 構

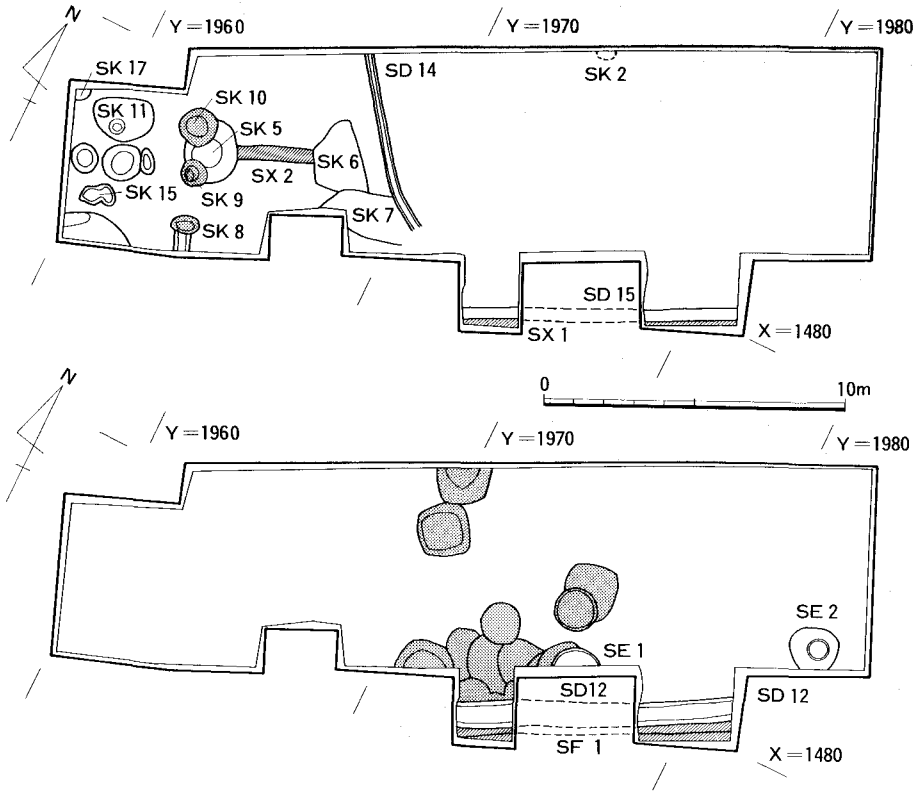


図26 中世の遺構（上）・近世の遺構（下） 縮尺 1/250

えられる。SK5は直径約2mで検出面よりの深さ1.1mほどをはかる円形の土坑であり、SX2の東端を破壊している。本来はSX2にともなっていたものと考えられる瓦が出土している。SK11は楕円形を呈する土坑で、12世紀末～13世紀前葉の土師器が出土した。SK2はY=1970より東で検出した唯一の中世の遺構であるが上部がほとんど削平されており、平面形を確認できず、わずかに底部を断面で確認し得たのみである。しかし断面および、その周辺に散乱した状況で14世紀の良好な一括資料となる整理箱2箱分の土師器を検出した。

溝 SD15は、後で述べる近世の道路遺構SF1と溝SD12と同じ東西方向に伸びるものであり、SD12のほぼ真下で検出したものである。暗茶褐色土を埋土とし、中世の遺物をふくむ。位置と方向からみて近世白川道に先行する中世の道路遺構にともなう側溝の可能性はある。SD14は北北西から南南東に伸びる溝である。断面はU字形を呈する。

## (2) 近世の遺構 (図版13, 図26)

近世の遺構には、調査区南端の道路 SF1 と野壺等の耕作に関連するものがある。

道路 SF1 (図版13-2・3) 現在の道路肩よりやや北寄りの地表下 1.3 m において北東から南西の方向にはしる道路の北側の肩を 2ヶ所で確認した。前章の AW27 区の調査で検出した道路 SF1 とつながる、近世白川道の一部である。確認しえた部分はわずかであるが、小礫混りの部分と、淡灰色細砂と茶褐色砂質土を混えた部分の 2面に区分できる。下面では轍の跡を数本検出している。SD12 は側溝と考えられる。

野壺・柱穴 SF1 に平行するように多数の野壺が検出された。SE1 と SE2 は漆喰製の野壺。SE2 は補修の結果、漆喰が二重になっていた。他はいずれも木製桶を用いていたと思われる (図26梨地)。SE1 は、木製桶の野壺群を切って構築されている。出土遺物からみていずれも近世後半の遺構である。また、調査区全面で直径 30 cm 前後の多数の柱穴を検出した (図版13-1)。これらの野壺および柱穴は、いずれも畑の耕作にともなう遺構と考えられる。

## 4 遺物

近世の遺物は数が少なく、遺構からの出土品も限られている。以下は中世の主な遺物について記述する。

土師器 (図版14, 図27・28) II1～II7 は SK11 出土の土師器である。II1 は 2 段撫で手法 C<sub>3</sub> 類, II2・II3 は 1 段撫で面取り手法 D<sub>5</sub> 類, II4 は 1 段撫で素縁手法 D<sub>3</sub> 類の土師器皿 [宇野82]。II5・II6 は 1 段撫で面取り手法 D<sub>5</sub> 類の土師器皿。II7 は土師器受け皿である。II1～II4 は口径 14 cm 前後, II5・II6 は口径 9 cm 前後である。中世京都 I 期古段階, 13 世紀前葉の資料である。

II8～II17 は SK15 出土の土師器である。II8～II10 は 1 段撫で面取り手法 D<sub>5</sub> 類の土師器皿。口径は 14 cm に中心をおく。II11～II16 は 1 段撫で手法 D<sub>3</sub> 類の土師器皿。口径は 9 cm に中心がある。II17 は土師器壺。粘土紐の積み上げの痕が明瞭に残るが、内外面ともに轆轤による回転を用いた丁寧な撫でが施されている。底部には静止糸切り痕を残す。先述の病院構内 AJ19 区 SK6 出土の同様の形態の壺は、中世京都 I 期中段階の土師器皿と相伴している。両者を比較してみると、今回の出土品はなだらかな肩をもち、全体に丸みを帯びた器形となっている。土師器皿の手法等を勘案すると、今回の資料は中世 I 期中段階の中でもより新しく位置づけられる。

遺 物

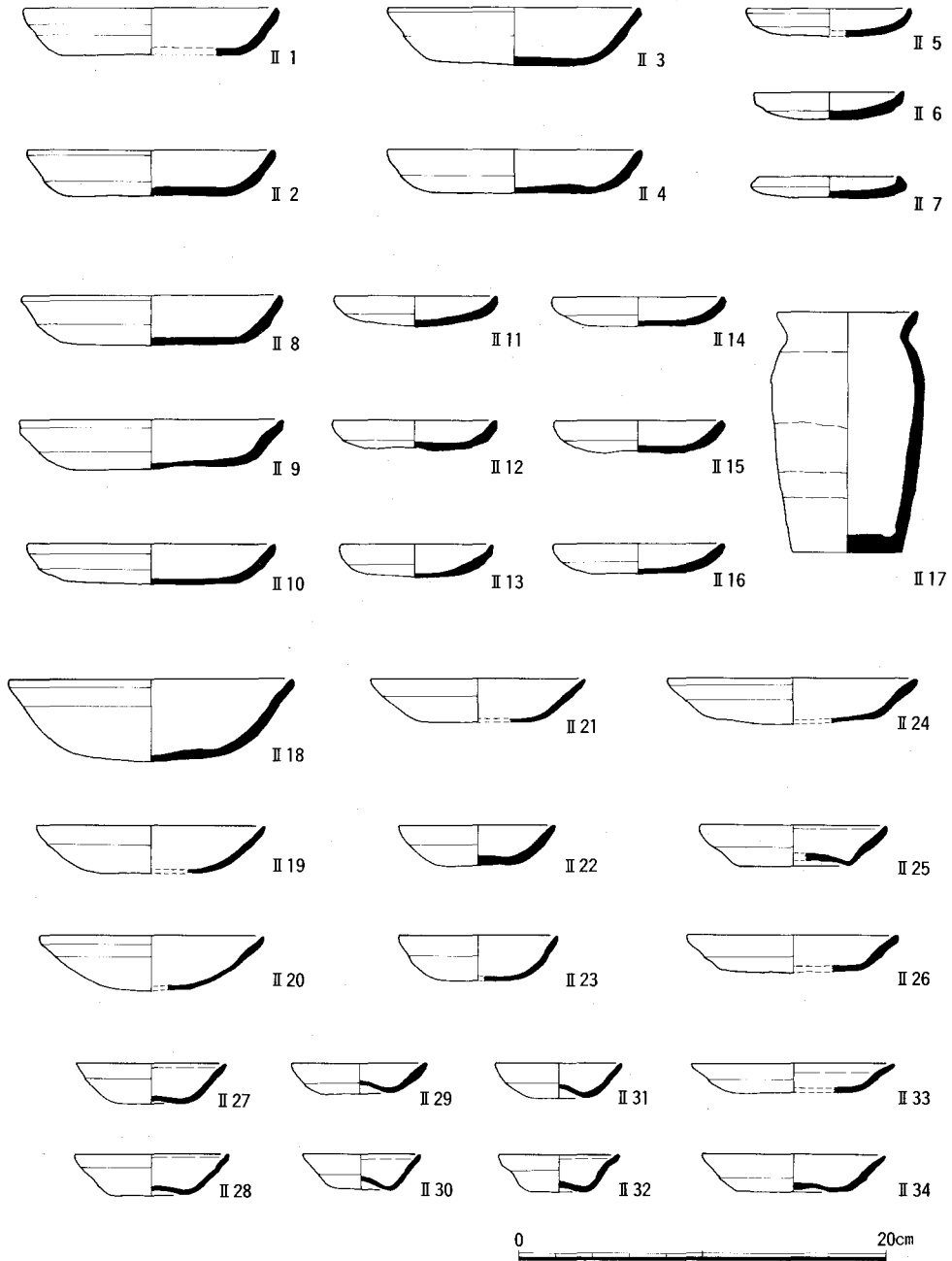


图27 SK11 出土遺物 (II 1~II 7土師器), SK15 出土遺物 (II 8~II 17土師器), SK2 出土遺物 (II 18~II 34土師器)

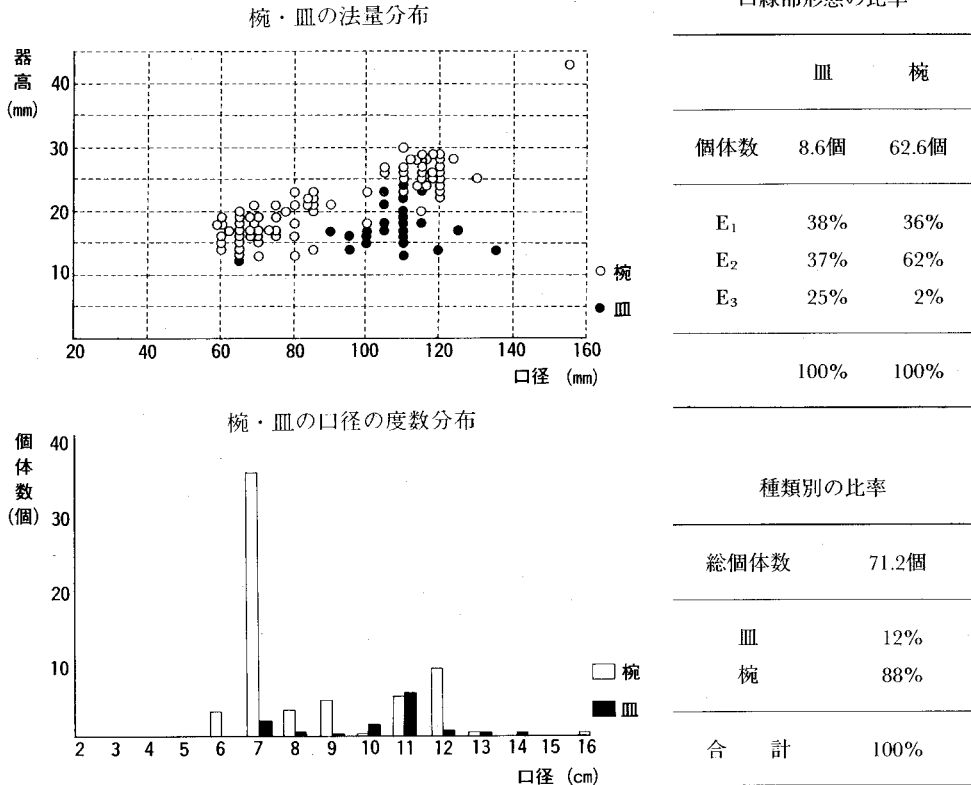


図28 SK2 出土土師器

SK2 出土土師器については、口縁部計測法を用いて、6分の1以上の口縁を残す破片について口径と器高を計測し、器種と法量分布の状況をみた(図28)。全体はまず、灰白色の椀(Ⅱ18~Ⅱ23, Ⅱ27~Ⅱ32)と赤褐色の皿(Ⅱ24~Ⅱ26, Ⅱ33・Ⅱ34)に二分される。椀と皿の量比は約9:1となる。椀は非常に薄く破損しやすいため、皿に対する比率や口径の大きなものは本来の数より少なくなっていると考えたほうがよいだろう。椀は、口径15.5cm, 器高4.5cmをはかる大型品(Ⅱ18), 11~12cmに口径をおくもの(Ⅱ19~Ⅱ21)と、口径8~9cmのもの(Ⅱ22・Ⅱ23)との中型品、口径8cm前後で底のやや凹むもの(Ⅱ24・Ⅱ25)と、口径7cm前後で凹底となる小型品(Ⅱ26~Ⅱ29)に大きく区分できるが、法量分布の幅は広い。皿は口径9cm以上のものが多く、器高は2cm以下である。口縁部形態はE<sub>1</sub>・E<sub>2</sub>類を主体としている。椀、皿ともに法量分化の著しい点の特徴である。以上のような特徴をもつ土師器と京都大学構内出土の比較できる資料として、医学部構内AN20区SE2出土の土師器がある〔五十川86〕。SE2出土資料に比べて

SK2 出土資料は、皿は口径 9 cm 以上のものが多い点、口径 20 cm を越える超大型品をふくまない点などに違いがあるが、ほぼ同時期に位置づけられるだろう。

瓦（図版15、図29） SX2 を中心として、軒丸瓦、軒平瓦を含む多くの瓦が出土した。SX2 は両端を土坑によって破壊されているので、他の遺構や包含層から検出した瓦も多くは本来 SX2 にともなっていたものと思われる。ここでは軒丸・軒平瓦について報告する。Ⅱ35～Ⅱ40はいずれも三巴文の廻りに珠文を巡らした軒丸瓦である。周縁部が文様面よりも突出している。Ⅱ35・Ⅱ36・Ⅱ38は珠文の粒の大小等が一致し、範傷による確認はできないが同範の可能性が強い。Ⅱ39も同文であるが、文様の表出は扁平である。Ⅱ37とⅡ40は巴文間に走る範傷の一致する同範品である。これらはいずれも瓦当裏面に指の圧痕を残す。色調は灰褐色であるが、Ⅱ35・Ⅱ37は二次的な火を受けて赤変している。SX2 の下層に部分的に広がっていた黄褐色粘質土出土の軒丸瓦Ⅱ41・Ⅱ42は、やや異なる特徴をもつ。文様には珠文がなく、周縁部の突出が低く、色調は灰色で焼成は堅緻である。Ⅱ42は瓦当部が大きい。

Ⅱ43～Ⅱ49は剣頭文軒平瓦。Ⅱ43は幅 18.7 cm をはかる。平瓦部上面には、縦横とも 1 cm あたり 11 本程度の織り密度を示す布目圧痕が残り、下面には指等による調整痕を残す。瓦当部は折り曲げ造り技法によって作りだしており、瓦当面に布目圧痕を残す。範に押しつけた後、瓦当裏面の折り曲げのしわを筥などで調整し、瓦当上端を撫でて面を取る。文様の彫りは深く鋭い。Ⅱ43～Ⅱ46はほぼ同じ文様をもち、同範品が含まれているものと考えられる。軒丸瓦Ⅱ35～Ⅱ40とよく似た焼成、胎土をもつ。Ⅱ43・Ⅱ44は二次的な火による赤変が顕著である。黄褐色粘質土出土のⅡ47は、中央に×印の文様をもち瓦当部がやや小さく、上端を面取りしない。色調は淡灰色、焼成は堅緻なものである。やや摩滅が進んでいる。茶褐色土出土のⅡ48・Ⅱ49は、Ⅱ43～46と似るがやや異なる形状の剣頭文が施されている。全体として軒丸・軒平瓦は13世紀後半の特徴を示す。なお、菊花や四菱などの押印を端面にもつ平瓦を数点検出している。

SX2 及び調査区全体で、軒丸瓦と軒平瓦の構成比率がよく揃っていることが特徴である。SX2 出土の軒丸瓦は 5 個体、軒平瓦 6 個体であり、調査区全体ではそれぞれ 14 個体、17 個体となる。軒瓦の文様が全体としては統一的なものであることも、これらの瓦がまとまりをもったものであることを示している。礎石などと関連するものと考えられる花崗岩の破片や、炭化材など他の出土品からも、SX2 には火災によって損壊した建造物の一部分がまとまって廃棄されたものと想定することができよう。

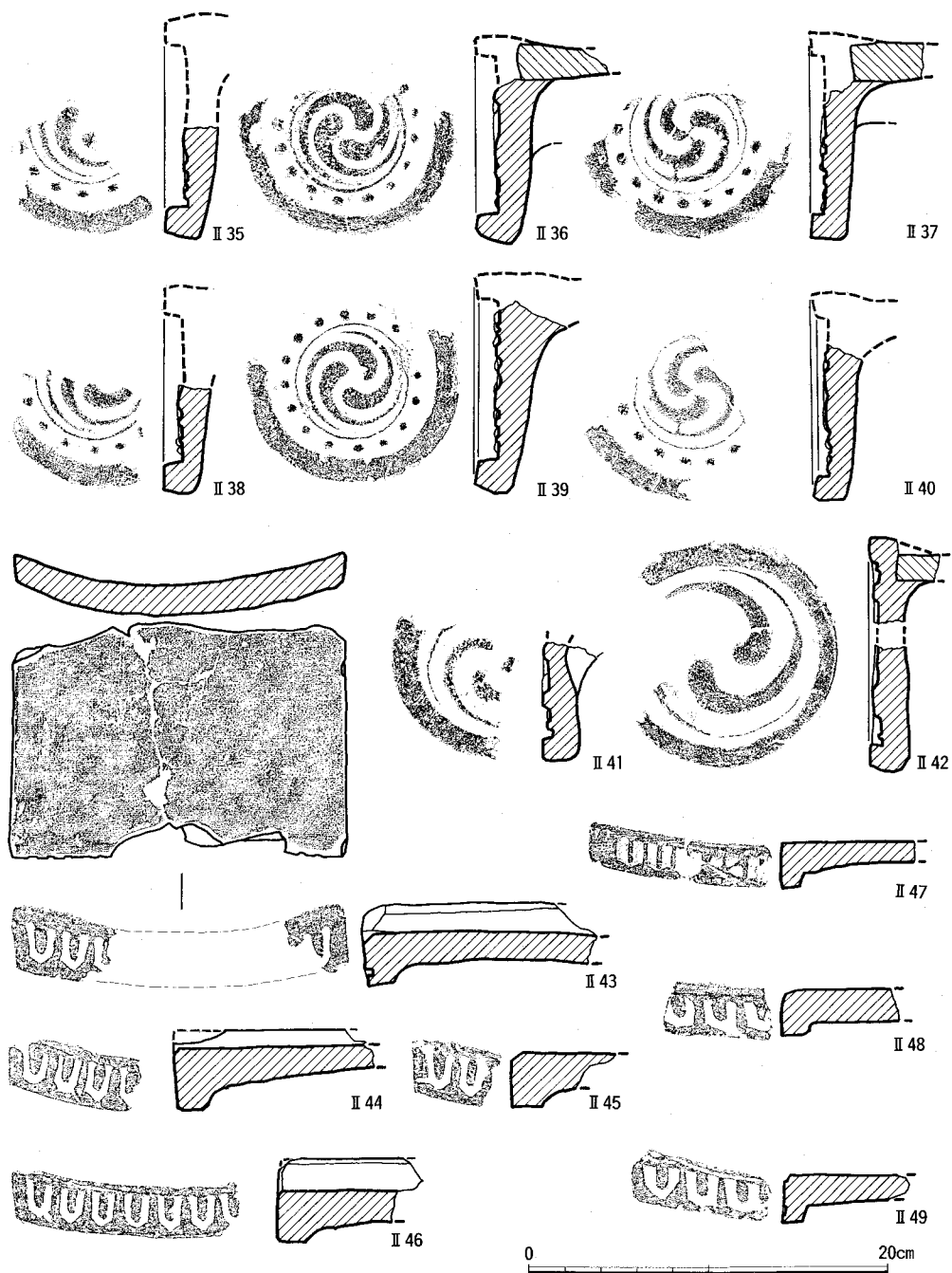


図29 軒丸瓦 (II 35 SK6, II 36・II 37 SX2, II 38 攪乱, II 39・II 40 SK5, II 41・II 42 黄褐色粘質土), 軒平瓦 (II 43 SX2, II 44・II 45 SK6, II 46 SK5, II 47 黄褐色粘質土, II 48・II 49 茶褐色土)



## 6 小 結

本調査においては、多量の瓦や礎石の破片を含む瓦溜や、柱穴の可能性のある土坑など、寺院や邸宅に関連するものと考えられる中世の遺構を検出した。石組や土師器壺を埋納した土坑も、この建造物に関わる遺構の可能性はある。SX2は二次的に火を受けた痕をとどめる瓦、花崗岩の破片や炭化物等を含んでおり、この遺構が火災による建造物のまとまった損壊に関連するものであることを示している。地形的にみても、南西に伸びる微高地上であり、南や西に向けてはやや段をなして下がる位置にあり、調査区北方は削平の可能性はあるが東方にかけて遺構の広がり期待できよう。出土遺物からみてこれらの遺構の時期は13世紀を中心とするものと考えられるが、この時期は京都大学構内全体で遺構が急増する時期であり、この一帯の開発が大きく進展し、寺院や邸宅の建設が盛んにおこなわれたものと考えられる。

文献に記載されたこの地一帯に存在した建造物の中で、これらの遺構に該当する可能性のあるものとして、『宣胤卿記』等に記述された浄蓮華院<sup>じょうれんげいん</sup>があげられる。浄蓮華院は正治元（1199）年に藤原北家勸修寺流の吉田経房が建立した寺院である。経房の死後は菩提寺となったが、応仁の乱以降荒廃し、吉田社の横領により、16世紀中ごろには退転したようである。その位置については『山城名勝志』に「吉田村北口三町許西也、今田字号浄蓮華院」とあり、京都大学教養部構内西半から医学部構内に比定できる〔浜崎83b〕。『宣胤卿記』には荒廃の進行によって、寺領が耕地と化したさまが述べられている。本調査区検出の中世の遺構が13世紀を中心とし、14世紀中葉のSK2を最後に近世後半にいたるまで顕著な遺構が認められないことは、そうした浄蓮華院の退転に至る軌跡と重ね合わすことができよう。

近世白川道については本調査を含めて7ヵ所の地点でその位置を確認したことになる。前章で報告したAW27区の調査結果と比較してみると、今回は道の小部分の調査のため道路面の正確な対応関係を定めることはできないが、直線距離にして約500mの間で、約6.5mの高低差となり、比較的なだらかな勾配をなしている。AW27区では、南に下がる傾斜地を切り通し、北側に崖面をつくって造成されていることが判明している。本調査区の白川道の地形上での位置も微高地の縁辺部を通してあるものと考えられ、そうした起伏の中腹を縫いながら、山中越えに向けて徐々に高度を上げていくような意図をもった造成がなされていたものと考えられることができる。

## 芝蘭会国際交流会館建設予定地 AR19 区の発掘調査

白川道沿道には、これまでの調査においても多数の野壺がともなうことが確認されている。市中より運送した下肥の蓄積のための工夫である。近世後半には、商品作物としての蔬菜栽培が多肥集約型によって著しい発達を遂げている。白川道沿いに続く野壺の重なりは、こうした都市近郊型農業の隆盛ぶりを示すとともに、道の果たした様々な機能の一端を物語るものである。